社会と時間①

近代日本の休日制度に見る生活リズムと「月」の疎遠化

時間学研究所　右田裕規

柳田国男・大藤時彦『世相史』1943年

「〔1872年の太陽暦採用に当たって民衆が〕太陰暦に固執することに先ず考ふべきは月の盈虧〔みちかけ〕であつた．種蒔きや収穫などこれを基準にしてゐることが普通である．そして年中行事が又旧暦の日数によつて名付けられてゐたのでこれを変へることは感覚上面白くなかつた．たとへば月の出ない晩の盆踊などは考へられないことだつた．〔・・・長らく陰暦にもとづいた生活を送ってきた〕我が国では月に対して感情上，実生活上非常な親密な間柄にあつた．」

～旧暦から太陽暦への移行をきっかけに，日本人の生活リズムと月の密接な関係がゆるんだという指摘

ここでは，この指摘の具体的な中身について説明．

近世：人びとの日常生活を区切る休日・祭日＝毎月の一日と十五日に集中

陰暦の一日と十五日：新月と満月になる日付

時代	属性	定期的休日	祝祭日、臨時の休日
近世	職人	毎月1日・15日	自家の冠婚葬祭日、藪入りなど
	武士	毎月1・15日	正月、盆、節供、藩に関連した日付など
	農業従事者	毎月1・15日（近世後半）。4日ごとに1日休養など（近世後半の北陸・東北など）	正月、盆、節供、地域祭礼、臨時の祭礼、願い休日
	商業従事者	毎月1日・15日。	藪入り、恵比寿講など
1930年代	工場労働者	新暦の毎月1日・15日。	正月、盆、国祭日、藪入り
	公務員、会社員	日曜日	正月、盆、国祭日
	農業従事者	農休み（労働休日）。	正月、盆、節供、地域祭礼
	商店員	月1日か2日（1日と15日周辺、あるいは第一・第三日曜）	藪入り

その他の要因：

１）国家的記念日の祝祭日化と，伝統的な祝祭日の国祭日化（1870年代～）

＝月齢とは関連しない日付が，人びとの生活リズムをつくる特別な時間として成立（とくに都市では地域祭礼以上に大きな祝祭となる）。

農村の場合，陰暦にもとづいた祭日を優先する傾向が長く続く．1950年代ごろになってようやくこの慣習は衰退

例：「正月」の日取り（三省堂編集所編1949：234-8；新生活運動協会1956）

・1946年の旧正月調査（自治体を調査対象）．「新暦で正月を祝う」のは，都市（112都市）では93％，村（4067村）では40％，旧暦か月遅れで祝うのは46％.

・1956年の旧正月調査（32市90町村2599人が回答）．新暦で正月を祝う郡部は63.0％，旧暦・月遅れ37％.

2）ホワイトカラーを中心とした，週休制の採用（1870年代～）．公務員，会社員，銀行員など

＝日曜日を区切りとする，7日周期の生活感覚の拡がり。週末をまちわびる現代的感情の定着.

例：1934年から35年，大阪市内の会社員（510人）に，仕事の「能率の上る」曜日を選ばせた調査．23.9%（122人）が「週末に近づくに従つて能率が上昇する」回答傾向（星野 1937：100；星野 1938：220）.

3)近世後半からの，月齢とは無関係な定休日設定の増加という長期的趨勢（古川2003など）

20世紀後半：月に対する「感情上，実生活上」の愛着や関心のさらなる低落。あるいは夜の空を眺めることへの関心の後退。

・家庭内の年中行事調査（大阪市地域婦人団体協議会．大阪市内の世帯を対象）．

「お月見」を祝う世帯の割合

1966年度（回答数1043）＝56％

1980年度（同972）＝37％（坂本1968ほか）

・東京都の定期世論調査．「東京に暮らしていていやだ」と思うことについて「星空がみえない」ことを選んだ都民の割合．77年＝26％，79年＝25％，81年＝21％．87年＝19％

（坂本1968；『朝日新聞』1980.11.24；『東京行政資料集録』1982年度；『世論調査年鑑』1988年度）

引用文献

古川貞雄，2003，『増補村の遊び日』農山漁村文化協会

坂本秀雄，1968，「現代家族と余暇」『社会教育』23（8）

神戸市社会部庶務課編・発行，1939，『登録者実情調査』

三省堂編集所編 ，1949，　『暦と生活』三省堂出版

星野周一郎，1937，「給料生活者の観たる給料生活」『社会政策時報』196.

星野周一郎，1938，「サラリーマンの生活形態について」『社会政策時報』215.

新生活運動協会編・発行，1956，『新生活運動世論調査』第2集